

権威主義の形成過程

——母子間の態度伝達——

東京女子大学
五十里 玉 喜

東京女子大学
岡 田 啓 子

東京女子大学
小 口 秀 子

東京女子大学
藤 田 美 弥 子

お茶の水女子大学
藤 永 保

問 題

権威主義的人格の概念は、周知のように Fromm, E. に始まるが、大戦後、アメリカで Adorno, T. W. ら (1950) によりその実証的研究が進められ、画期的な進展をみた。特に彼らが、A-S 尺度、E 尺度、PEC 尺度および、一種の反民主主義的傾向＝潜在ファシズムを測る F 尺度などを次々に作成し、権威主義的人格の内容を操作的に明らかにしたことは大きな功績といえよう。F 尺度は 9 個の下位尺度——因襲主義、権威主義的服従、権威主義的攻撃、反内省的傾向 (anti-intraception)、迷信とステレオタイプ、権力とタフネス、破壊性とシニシズム、投射性、性——より成り、この 9 個の症候群がダイナミックに偏見と関係していると考えられる (付録参照)。Adorno らは、F 尺度、A-S 尺度、E 尺度、PEC 尺度で測られる態度を生むようなパターンを持つ人格構造を権威主義的人格と名づけた。また、Frenkel-Brunswick, E. (1949), Harris, D. B. (1950) らにより、子どもにも権威主義的人格が存在することが明らかにされた。

権威主義的人格の起源についての研究も多く、それらによると、子どもの権威主義的人格を形成するものは、第 1 に、幼少期における環境、特に両親のしつけ態度による個人的教化と、第 2 に、その社会の持つ歴史的文化的要因による伝統的価値の間接的な内在化であると考えられる。以上の 2 点から、本研究では、(1)日本における伝統的文化の型を考慮した尺度の作成、(2)親子間における権威主義的態度伝達のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

第 1 の問題として、F 尺度は直接的には社会的態度を測定するものであるから、社会的背景の異なる Adorno らの F 尺度の逐語訳をそのまま適用するのは不適當と思

われる。従って、本研究では、F 尺度の基礎にあるパーソナリティ・ダイナミクスに注目し、日本の文化的社会的背景を考慮に入れた F 尺度を作成したい。ここで、日本における伝統的文化型の独自の特徴として、特に目立つ 3 つの傾向に注目し、おのおのを美意識、家族主義、宗教への蔑視と呼ぶことにする。

「美意識」とは、「恥の文化」と呼ばれてきたような伝統的価値規範を指す。美感の徳性への代用、他律道徳、恥の重視などがその主要な内容をなすと考えられる。「家族主義」とは、「家」中心的な物の見方、考え方、対人関係などを指す。「宗教への蔑視」は、日本人に見られる宗教への無関心、宗教を持つ少数の人々に対する偏見、攻撃の態度などを指し、ここにいう美意識と表裏の関係をなす。以上の 3 つを、前述の 9 症候群のうち「性」を除く 8 個に加えて、子ども用の F 尺度を作成することを目指す。

第 2 の問題として、多くの研究の結果、権威主義的人格の形成には親の影響が大きな要因になることが明らかにされている。本研究では、権威主義的人格の形成において、母親の権威主義的態度の子どもの態度に対する影響のあり方が直接的に伝わる場合と、しつけを媒介として間接的に伝わる場合の 2 つの伝達方式があると仮定して、これについて検討したい。子どもは親を 1 つのモデルとしているので、親の持つ価値観や社会的態度を無意識に自分の中に取り入れていると考えられる。直接的態度伝達とは、このように同一視またはモデリングによって、直接に親の態度の影響をうける場合を指す。(たとえば、Bandura & Walters, 1963) これに対し、間接的伝達の際には、母親が意図的に行なうしつけが大きな要因になり、しつけの型やその効果によって、子どもへの伝達効果が強められたり弱められたりすると考えられる。

個人の持つ社会的態度は、その人の基本的性格特性から派生していると考えられるので、権威主義的人格の母親がとるしつけ態度の中にも権威主義的傾向が見られるであろう。Frenkel-Brunswik, E. (1949) によれば、権威主義的母亲は、子どもの人格を認めず、支配と服従の親子関係をとることが示唆された。このようなしつけを本研究では「力の次元のしつけ」と呼び、それと対照的な民主的しつけを「愛の次元のしつけ」と呼ぶことにする。

力の次元のしつけ態度の特徴としては、次のようなものがあげられるであろう。(1)子どもの人格を認めず、子を親の所有物と考える。(2)子どもの本性は悪であり、悪の芽を刈るのが親の役目だと信じこむ、(3)子どもを統制するという意味での親の責任を重視し、親の価値観に合った行動をとるよう強制する。(4)一定の育て方や考え方に固執し、しつけの基本は報酬と罰であると信じて過酷な罰も与える。(5)内面的な事柄を軽視し、外面的なことについてのみ厳しく育てる。自分のしつけ態度を深く反省などしない。

さらに副次的問題として、母親の権威主義的態度の子どもへの伝達パターンは、子どもの性により異なるか否か、また発達的に変化してゆくものかどうか、変化してゆくとすれば、どのように伝達の形が変化してゆくのかについても明らかにしたい。

方 法

調査計画

以上の問題を検討するために、質問紙法による調査を行った。調査対象は、公立小学校の4・5・6年と中学1年の男女、およびその母親とし、社会的階層的条件の異なる住宅地区(第Ⅰ地域)、工業地帯(第Ⅱ地域)、郊外住宅地区(第Ⅲ地域)、商業地帯(第Ⅳ地域)の4地域から選択した。子どもに対する質問紙と母親に対する質問紙を作成し、子どもに対しては学校に於て調査を施行、母親に対しては、子どもを通じて依頼状を添えた質問紙を配布し、1週間以内に回収した。

質問紙の作成

1) 子ども用質問紙(付録参照)

(1) F尺度: 子どもにおける権威主義的態度を測定するために、問題提出で述べた11次元に従って、78項目から成る態度尺度を作成した。これは、1つの項目に2つの次元が重複している場合があるので実際には90態度反応が得られることになる。作成にあたっては、California F尺度、Adorno et al. (1950)を参考にして、無理なく日本語に翻訳できるものはそのまま取り入れ、不自然

なもの及び社会的条件の差によって理解しがたいもの等は、おのおの適当に翻案した。回答肢は「非常に賛成」から「非常に反対」までの5段階とした。各次元に対応する項目の数は次のとおりである。

因襲主義…10, 権威主義的服従…4, 権威主義的攻撃…7, 反内省的傾向…7, 迷信とステレオタイプ…13
権力とタフネス…13, 破壊性とシニシズム…9, 投射性…4, 以下本研究独自の項目, 宗教への蔑視…2, 家族主義…5, 美意識…6

(2) 子どもの認知した母のしつけ(以下、子しつけ①②と略称する)

子しつけ①: 権威主義的な母親は力の次元でしつけを行ない、民主的な母親は愛の次元でしつけを行なうと考えられる。そこで、子どもが具体的場面での親のしつけをどちらの次元に近いと認知しているかを見るために、この間を設定した。力の次元と愛の次元を代表するようなしつけ態度を2つ並列して、そのうちから、自分の家庭で実際に重視され、行なわれていると思うものを強制選択させる。

子しつけ②: 権威主義的な親は子どもを1個の人格として認めていないので、しつけの際にも、理由を納得させずに子どもに押しつけたり、自己中心的な感情を爆発させると考えられる。この質問は、親が子どもを1個の人格として認めているか否かを、子どもの認知を通して明らかにすることを目指す。項目は品川の質問紙、品川不二郎他(1958)を参考にして作成し、2件法で回答させる。

(3) 母親に対して持つ理想像と現実像の差(以下、イメージ差と略称): 親の態度伝達の媒介メカニズムの1つとしてモデリングが考えられる。モデリングを想定するなら、理想の母親像と現実の母親像の間のギャップが大きい場合には、母親の態度摂取はうまく行なわれないと考えられる。このギャップの大きさを測定するために、SD法を用いて、理想の母親像について5組の対語を5段階法で評定させ、次に現実の母親についても同一の組の対語に関して評定させる。

(4) 自由記述: 前述の質問紙では引き出せなかったような、親に対する感情を投影させるために、文章完成法を用いた。

以上、F尺度によって子どもの権威主義的態度を測定し、さらに母親の具体的しつけのあり方がどの程度権威主義的であるかを、2つの側面から子どもの認知を通して測定するために、「子しつけ①②」を設けた。また、「イメージ差」によって、母子の態度伝達のメカニズムとしての同一視のあり方をみようとした。最後に、文章

完成法により、親に対する感情をプロジェクトブに取り出そうと試みた。

2) 母親用質問紙 (付録参照)

(1) F尺度：母親の権威主義的態度を測定するためのF尺度は、子どものF得点との関係を見る目的から、子ども用F尺度の項目に対応するような項目を選定した。

(2) 母親のしつけ態度 (以下、母しつけと略称)：従来、質問紙法により、母親のしつけ態度に関する多数の研究が行なわれているが、必ずしも現実の方針と一致した態度を測定しているとはいえない点がある。そこで、本研究では、むしろ具体的場面でのしつけ態度を問う質問を避けて、しつけに関する原則を問う質問紙を作り、母親が防衛的な態度をとって実際のしつけよりも理想的な回答を行なう傾向を防ごうとした。権威主義的人格の親がとると考えられるしつけ態度の次元として、次の8次元を考え、それらに即して、現在・過去・未来のすべての時点にわたる場面でのしつけ態度について12の

項目を作った。回答方法はF尺度と同様に5段階法を採用した。

8次元：①外面的なものを重視する。②子どもを1個の人格として認めない。③自分のことばと行動が一致していないことに気づかない。④報酬と罰とがしつけの基本と考える。⑤子どもの本性を悪と考える。⑥ある育て方や考え方に固執する。⑦子どもを親の所有物と考える。⑧子どもを統制するという意味での親の責任を重視する。

(3) プロジェクトブなテスト (以下、MPTと略称)：絵画・欲求不満テストの手法を用いて、曖昧で多様な受け取り方ができる場面を3場面設定し、その場面の認知の仕方と対策、およびそこに出てくる子どもに対する評価を求める。これを母親の具体的なしつけ態度の表出と考えたい。権威主義的人格の母親は、ある事態にあたった時の認知の仕方が投射的であり、一方的に子どものわがままと決めつけやすいと考えられる。本質問紙では、

Table 1 調査実施状況

調 査	地 域	調 査 校 名	学 年	調 査 期 日 1967年	生 徒 数			母 親	母 親
					男	女	計	回 収 数	回 収 率 (%)
予 調 査	I	八 幡 小	5	6. 2	36	29	65	—	—
調 <									

主役を占める子どもの年齢を低くして、母親のしつけ態度が強く反映するようにした。

(4) 基本的属性：家庭を取りまく背景を見るために、父母の年齢、学歴、支持政党を無記名で回答してもらう。

以上、子どものF尺度と対応したF尺度によって、母親の権威主義的態度を測定し、権威主義的と思われる母親のしつけを、抽象的次元でのしつけと具体的場面でのしつけの2側面からの測定をするために、「母しつけ」と「MPT」を設けた。また、地域差の裏づけとF得点との関係を見るために、年齢、学歴、支持政党を調べた。

予備調査

事前に小学校5年生65名に対してF尺度のプリテストを行ない、本調査で用いる項目を42項目にふるうことにした。すなわち、被調査者の中央値が、5段階のうち極端にどちらかに偏っているものを除いて、42項目を残した。また、被調査者の内観を参考にして wording を改め、インストラクションの訂正を行なった。

調査Ⅰの施行

1) 目的

(1)予備調査に基づいて作成した子ども用F尺度によって、子どもの権威主義的態度を測定する。(2)子ども用F尺度と対応した母親用F尺度を作成し、母親の権威主義的態度を測定する。また、権威主義的しつけ態度を測定し、権威主義的態度をもつ母親が権威主義的しつけ態度をとるか否かをみる。(3)F尺度によって測定された母親と子どもの権威主義的態度の相関をとり、直接的な態度伝達をみる。(4)母親の権威主義的しつけと子どもの権威主義的態度との相関をとり、しつけによる間接的な態度伝達をみる。(5)母親と子どもの直接的態度伝達の媒介メカニズムの1つと考えられるモデリングについて考える。(6)母親の態度の子どもへの伝達のされ方が発達的に変化するかどうかをみる。(7)性差による母親の態度伝達のされ方の違いをみる。

2) 手続

子ども用質問紙への記入は各学校の教室において施行し、母親用の質問紙は、依頼状を添えて封筒に入れて子どもを通して配布し、クラス担任教師の手を通じて回収した。母親は、無記名のほうが回答しやすいと思われたので無記名としたが、母子の相関をとる都合上、母と子の質問紙に対ナンバーをつけて配布した。生徒への教示としては、この質問紙は評価の対象にはならないので正直に書くこと、秘密の保証、抜かさないこと、読めない字や質問の意味がわからない時は質問すること等を述べたが、現場の教師の示唆により、4年生に対しては質問

項目を1つずつ読み上げ、適宜にその意味の説明を加えた。

調査Ⅱの施行

1) 目的

調査Ⅰの結果、年齢が上がるに従い、母子の態度の相関が高まる傾向がみられた。これは、年齢が上がるにつれて自己の態度も徐々に確立し、母のしつけ態度に対する認知も客観的になるので、母子間の態度の相関が一層高まるためと思われる。また、男子よりも女子の方が母の態度との相関が高く、男子の場合は母以外の影響(例えば父親)が強いためではないかと思われた。そこで、以上の2点を明らかにするために調査Ⅱを行なった。

2) 子ども用質問紙

(1) F尺度：調査Ⅰの結果、リッカート法により一元化した項目(男子23, 女子21項目)を用いる。

(2) 子しつけ：しつけ①は調査Ⅰと同じである。しつけ②は質問内容は調査Ⅰと同じであるが、子どもの認知を通した母のしつけ、父のしつけを見る。

(3) イメージ差：質問内容は調査Ⅰと同じであるが、父母双方についてたずね、父へのイメージ差も測る。

(4) 自由記述：調査Ⅰの結果、資料としては不十分であったので、ここでは削除した。

(5) 両親の意見に対する子どもの評価(以下、相談・適切と略称)：中学上級になると、子どもは進学や青年期特有の悩み等をかかえていると思われるが、その場合に子どもが親を相談相手として選ぶかどうか、また、父母の意見をどの程度適切と考えているのかを問い、両親のどちらの影響をより強く受けているかを測るためにこの問を設けた。おのおの5段階で評定を求める。

3) 母親用質問紙

(1) F尺度：調査Ⅰの結果、リッカート法により一元化された項目(25項目)を用いる。

(2) 母しつけ：調査Ⅰの結果により、問10と問12を削除し、残りの10問を用いる。

(3) 父親のしつけ態度(以下、父しつけと略称)：父親のしつけ態度と母親のしつけ態度のずれをみるために、母しつけの質問項目中5問を選択し、母親に父親のしつけに対する意見を推測した上で記入してもらう。

(4) MPT：調査Ⅰの結果、無回答が多く、資料として不十分なので、一番多義性があるB図のみを残し、他は削除する。

(5) 基本的属性：調査Ⅰとまったく同内容である。

4) 調査Ⅱの施行

調査Ⅰの結果、分析の対象となったⅠ地域とⅢ地域の同じ中学の3年生をおのおの2クラスずつ選んだ。

(Table 1)

(1) 目的：①中学3年生における母子の態度の相関をみる。②父親の子どもへの影響をみる。

(2) 手続：調査Iに準ずる。

結 果

資料検討の結果、親子ともに有効なデータは男子 335 名、女子 358 名、およびその母親である。

単純集計

1) 子どものF得点：男女とも学年が上るにつれて平均点が低く、range が広がっている。これは、低学年では信頼性が低く、未熟な社会的態度を表わしていると思われる。高学年になって range が広がり、初めて真の意味での個人差を反映するようになるといえよう。地域別にみると、男子ではⅡ地域とⅣ域で range が狭

く、女子ではⅡ地域の range が狭い。F 得点分布は、男女・各学年・各地域とも正規型を示していた (Table 2 参照)。

2) 子どもの認知したしつけ①②：わずかではあるが、男子の得点の方が女子より高い。(男子平均4.78, N=260, 女子平均4.36, N=287) これは、一般に男子の方が親のしつけを権威主義的な圧力として認知する傾向があるためと思われる。

3) 理想と現実の母のイメージ差：中学1年までは男女とも学年差は見られないが、中学3年になると、他学年に比べて平均値がやや上る傾向がみられる。この年齢になると親を客観的に評価できるようになり、また、要求水準が高まることが親に対する理想と現実の差を大きくすると考えられる。なお、中学3年における父と母のおのに対するイメージ差の平均値は、男女とも差がみ

Table 2 F 得 点

S _s		地域 F得点 学年		I			II			III			IV			全 体
				平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平 均
男 子	小	4	406	548	235	375	467	264	362	474	171	322	405	262	364.4	
		5	410	510	251	419	532	359	370	463	251	387	488	243	397.3	
		6	349	542	84	327	426	267	373	533	240	358	509	240	354.5	
	中	1	303	462	123	328	448	201	315	450	153	344	521	181	321.5	
		3	288	431	147	—	—	—	269	466	137	—	—	—	279.1	
	全 体		336	548	84	367	532	201	324	533	137	352	521	181	341.0	
女 子	小	4	419	473	340	334	402	208	382	531	264	337	467	215	367.8	
		5	400	558	265	384	488	272	358	534	184	382	485	145	381.0	
		6	354	473	258	341	469	246	348	512	187	362	517	263	352.6	
	中	1	323	430	216	311	411	173	274	402	140	304	510	134	303.8	
		3	297	432	132	—	—	—	231	521	18	—	—	—	261.2	
	全 体		347	588	132	342	488	173	305	534	18	345	517	134	331.9	
男 子 の 母	小	4	410	640	214	425	644	291	445	724	246	416	556	252	402.5	
		5	433	594	256	446	625	295	422	668	275	443	568	168	438.4	
		6	372	553	173	402	495	250	481	618	328	456	664	289	430.0	
	中	1	410	745	281	452	645	235	443	619	280	513	668	332	451.5	
		3	410	645	136	—	—	—	389	629	216	—	—	—	400.2	
	全 体		408	745	136	437	645	235	426	724	216	456	668	168	428.0	
女 子 の 母	小	4	412	645	217	436	512	351	429	624	265	445	611	213	430.7	
		5	430	637	167	488	811	293	475	686	241	416	616	240	452.4	
		6	427	538	370	431	684	290	420	726	184	444	673	272	429.7	
	中	1	442	563	340	448	597	270	382	589	152	463	653	249	436.1	
		3	431	648	247	—	—	—	398	605	0	—	—	—	412.7	
	全 体		429	648	167	451	811	270	417	726	0	442	673	213	432.6	

Table 3 イメージ差平均

	I 地域 小4～中1 中3		III 地域 小4～中1 中3	
男 子	1.86	< 2.28	1.90	< 2.25
女 子	1.81	< 2.41	1.77	< 2.05

られない。

4) 相談の程度・適切度：父母に相談をするか否かを中学3年に対してのみ問うたが、男子75名中12名、女子71名中5名が相談しないと答えた。また、父母の意見をどの程度適切と思うかについては、父母の適切度の平均値に差がないが、個人ごとにとみると父母の間に差のある子どももみられる。この2つの指標については後述する。

5) 母親のF得点：母親の得点分布は子どもと同様、各地域ともほぼ正規型を示していた。平均値について

は、I地域がやや低い傾向にあるが大差はない。

6) 父しつけ：中学3年のみに設問したが、母しつけと平均値 range とも差がなく、個人ごとに見ても差はみられない。この理由としては、実際に父母間に意見の差がないためとも考えられるが、母の記述によるものであるので、母自身の態度の反映であるとも考えられる。

7) MPT：各自が自分で判断して書かねばならなかったためか、無回答が多かった。II地域では、C図に対し「買ってやれない自分が悲しい」など、甘やかしや放任的回答が目立ち、しつけの様式に地域的差があるのではないかと思われた。

8) 基本的属性：父母の学歴は、II地域の小中学校とIV地域の中学校では義務教育卒に偏っていた。なお、IV地域においては、小学校と中学校の間に著しい差がみら

Table 4 相 関

相 関			学 年		性 別		人 数	
			小 6 (中1)*1		中 1		中 3	
			男	女	男	女	男	女
			78	69	39	34	75	71
内 部 相 関	母F	× 母しつけ	.550**	.612**	.632**	.674**	.549**	.485**
	父しつけ	× 母しつけ					t .647**	t .674**
	子F	× 子しつけ①②*3	.460**	.158**	.568**	.603**	t .394**	t .420**
	子F	× 子しつけ①②'					t .228**	t .335**
	子しつけ	× 子しつけ②	.470**	.578**			.388**	.341**
	子しつけ②	× 子しつけ②'					t .349**	t .378**
	子しつけ②	× 母イメージ差					t .322**	t .564**
	子しつけ②'	× 父イメージ差					t .216	t 0
	不適切*2	× 子しつけ①②					t .426**	t .347**
母 子 相 関	不適切	× 父・母イメージ差					t 0	t .342**
	子F	× 母F	.305*	.199	.280	t .441*	.150	.369**
	子F	× 母しつけ	t .179	t .203	t .279	t .436*	.162	.114
	子しつけ①②	× 母F	.085	.531**	.040	.184	.123	.131
	子しつけ①②	× 母しつけ	.203	.222	0	.279	.388**	.124
	しつけ一致の子F	× 母F	.643**	.302*	.603**	.609**	.121	.345**
	イメージ差	× 母子のF差	.378**	.336**	-.165	.274	t .087	.309**
	イメージ差	× 母F	-.113	.419**	-.163	.274		
	相談する子のF	× 母F					.258*	.428**

注 *1 少数の中学1年生を含む。

*2 不適切とは、親の意見の適切さを5段階中3以下と評価したものを示す。

*3 しつけ①、②は子どもが認知した母のしつけを示す(本文12参照)。

子しつけ②'は、子どもが認知した父のしつけを示す(14参照)。

*4 表中の*印、t印

t : Rtet (四分相関)を示す。

無印 : R (Pearson 相関)を示す。

** : 1%水準で相関有意。

* : 5%水準で相関有意。

れた。支持政党については、Ⅰ・Ⅲ地域では保守と革新がほぼ均衡しているが、Ⅱ地域では革新が、Ⅳ地域では保守が優勢である。また、公明党はⅡ地域とⅣ地域に多かった。

各指標間の相関

1) 内部相関

各質問紙の内部相関は、Table 4 に示すとおりである。権威主義は1つの構造をなすものであるから、権威主義的な社会態度をもつ母親は権威主義的しつけ方針をとるであろうと予測された。結果は予測どおり、いずれも正の相関を示している。なお、全地域547名（中学1年まで）についても、社会態度としつけの相関は $r = .413$ で1%水準で有意であった。子どもの態度と両親のしつけに対する認知の関係も同様で、小6と中1の女子を複合した場合を除き、かなり高い相関を示している。また、父しつけと母しつけ間には高い相関がみられたが、これは実際に父母のしつけ態度に差がないとも考えられるが、父のしつけ態度は母が推測したものであるから、母の態度が反映されているとも考えられる。子しつけ①と②の間には高い相関があり、当初予測した2つの観点は、互に方向が一致しているといえる。子どもの目から見た父母それぞれのしつけ態度には、高い一貫性があると認知されているが、これは母の目から見たもののほではない。また、両親の意見を適切でないと受けとめている場合には、しつけに対しても権威主義的であると認知している。さらに、女子においては、イメージ差とも関係をもつことが示唆された。

2) 親子の相関

子どもの権威主義的態度と母親の権威主義的態度との関係は、男女、学年により異なった型を示している。女子においては、学年が高くなるに従い母子の相関が高くなっており、逆に男子においては低くなっている。また、子どもの権威主義的態度と母親のしつけとの関係は、中学1年女子以外には高い相関はみられなかった。従って、子どもの権威主義的態度の形成についてはさらに深い分析が必要である。これについては考察で詳述するが、総じて、女子の方が男子よりも母親との関係が密接である傾向を示している。

3) 子どもの認知と母親との関係

母しつけと子しつけ（①+②）との相関は、全体的に有意な相関はなかった。この理由としては次のことが考えられる。母への質問がしつけの基本的方針をたずねた

ものであるのに対し、子どもへの質問は、具体的場面における母のしつけについてであった。母の側で基本的方針と具体的場面でのしつけが実際にはずれているものもあるうし、また、子どもが母のしつけをよく理解できなかったり、誤認していることもあると思われる。ここで、母のしつけについて、母子の見方が一致した親子のみで、母子のF得点相関をとると、女子の場合には各学年ともかなり高い有意な相関がみられ、男子についても、中学3年を除いては同様の結果であった。これについては後述する。

イメージ差と母と子のF得点の差との相関をみると、女子では低い正相関があり、母へのイメージ差が母の態度を取り入れるか否かに関係していることが推察される。このことは、親に相談するか否かにおいても同様で、相談する子のみについて母子F得点の相関をみると、男女とも相関が高まった。子どもの方から親の意見を取り入れることを拒否している場合には、当然のことながら、親の態度の影響を受けにくいことを示している。

4) 権威主義的態度と基本的属性

母の権威主義的態度と学歴の間には、低い有意な負相関がみられた($r_{tet} = -.220, P < .01$)。これはAdornoら(1950)の結果とほぼ一致し、学歴が低い方が権威主義的態度が高い傾向にあった。父の学歴と子のF得点の相関をみると、男子小学6年+中学1年、および中学1年では低い負相関があり、小6、中1、 $r_{tet} = -.271$ 、父と男子の関係が示唆されたが、この点については今後の研究が待たれる。権威主義的態度と支持政党との関係は、無回答および支持政党なしの回答が多いため、相関の資料とはしなかった。各政党別にF得点の平均値を比較した結果では大きな差はみられなかった(Table 5参照)。

Table 5 支持政党とF得点

政党	自民	社会	民社	共産	公明	その他 無 答
F得点 平均						
Fscore	447.3	421.6	416.8	455.0	443.1	429.8
N	178	143	21	2	38	165

考 察

F得点について

子どものF得点には男女差はないが、年齢差がみられた。すなわち、子どもの年齢が高くなるに従い、F得点は低下する傾向がある。この原因としては、次の3点が

- 1) 両親のしつけ態度が極端に分離しているようなケースはほとんどなかった。

考えられる。

(1)F尺度の全項目が権威主義的傾向を肯定するような型であるため、知的に低い水準にある低学年では、response bias (Kirscht, J. P. & Dillehay, R. C. 1967) がF得点に影響しているかもしれない。(2)現在の日本では民主主義的学校教育が目的とされているため、権威主義的態度も教育により徐々に矯正され、得点の平均が学年とともに下降してゆくのではないか。(3)権威主義的態度は、ある意味で未熟な態度の現われと考えられる。この見地に立てば、学年が上るに従い子どもは成熟してゆくの、F得点の平均が下降するとも考えられる。

母親のF得点には年齢差は見られない。母親と子どものF得点平均値の間には、有意ではないが差がみられた。1項目あたりの得点を比較すると、低年齢の子と母の間には差がないが、高年齢の子と母の間には差があり、子どもの方が母より低得点の傾向がある。このことについては、子どもと母親の中間年齢層を調べる必要があるが、日本の歴史的背景——本調査の対象になった母親のほとんどが、戦前戦中の教育を受けているという事実も一因と考えられる。

母親と子どもの相関

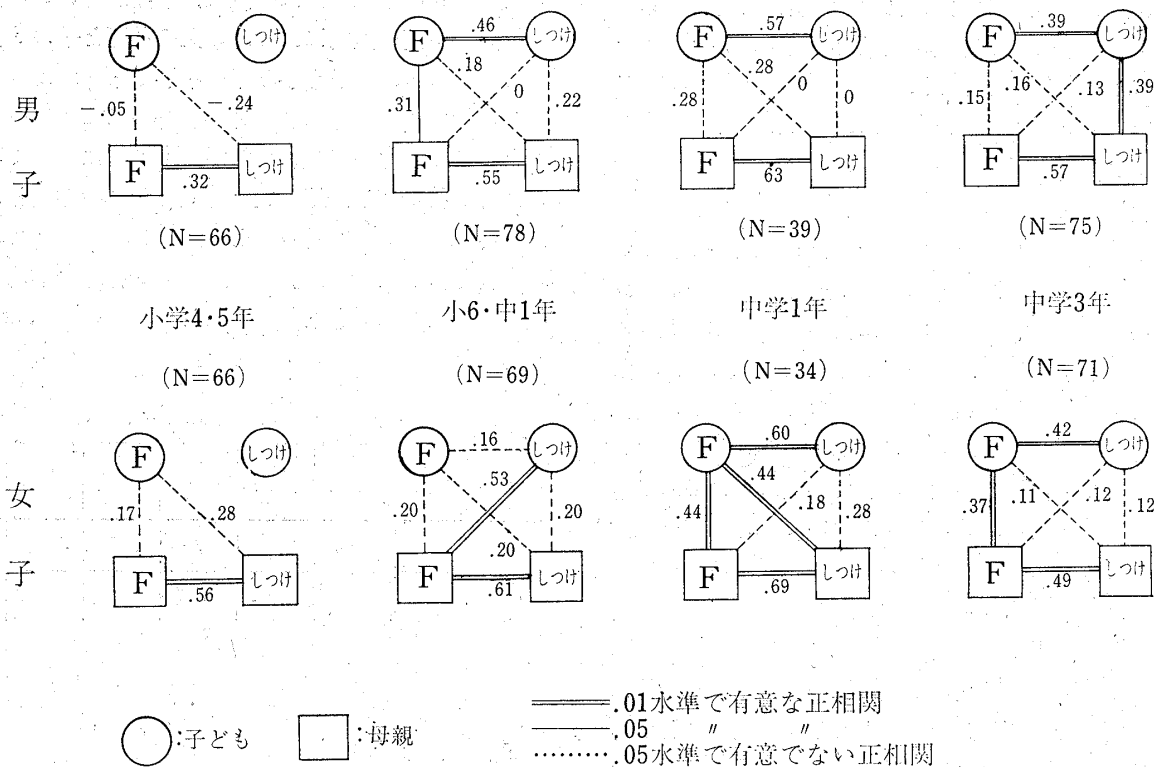


Fig. 1 母親と子どもの相関

母子の相関は Fig. 1 に示すとおりである。母子のF得点相関には年齢差と性差が認められるが、これについては次の節で後述する。母のしつけと子のしつけの相関はかなり低い、この原因として、次の3点が考えられる。

(1)本質問紙では、母親に基本的なしつけ方針を問うたが、これと実際に行なっているしつけとは多少のずれがあるかもしれない。(2)子どもが母の意図することを正しく認知できないために、母子間でしつけに対する見方が食違った。(3)特に低年齢児では、調査直前のできごと（しかられた等）に感情的に影響される可能性も大きい。

また、母のしつけについて、母子の見方が一致したもののみで母子のF得点の相関をとると、相関は正の方向に高まった。

母親の態度の伝達

Fig. 1 の相関をみると、母親の態度が子どもに伝わる際には、母の社会的態度としつけの両者が複雑にからみ合っており、態度伝達のパターンには発達差と性差があると考えられる。

1) 女子の場合

年齢の変化に伴ない、母子のF得点相関と、母しつけ

×子F得点の相関との比重が変化している (Table 6)。このことから、低年齢の子どもでは、母の態度がしつけを通して間接的に伝わるが、年齢が高くなるに従い、しつけの占める割合が小さくなり、相対的に母の態度の直接的影響の方が大きくなる。また、その転換期は中学1年生ごろと推察される。これを支持する資料として、母と子でしつけの見方が一致した者のみの母子F得点相関をとると、一致不一致混合の場合よりも、相関が正方向に高まるという結果が得られた。しかし中学3年生の場合には、母子間のしつけの見方の一致度とF得点の一致度の間に関係がみられなかった。従って、この年齢になると、態度伝達におけるしつけの役割がほとんど失われていると推察される。

Table 6 母子の態度伝達における母のしつけと社会的態度の関与度

	小4・ 5年	小6・ 中1	中1年	中3年
母F×子F	.165 ^	.199 	.441 	.369 V
母しつけ×子F	.281	.203	.436	.114

数字はピアソン偏差積率相関係数

次に母の社会的態度としつけとが一貫しているか否かに注目して、次のようなメジャーを出してみた。母のF得点、しつけ得点のおのおのを中位数で分割して、上位群と下位群に分け、両得点とも等しく上位または下位群に属しているものを一貫性があるものとし、食違う場合を一貫性がないとする。母のF得点と子のF得点の一致度についても同様の操作を行ない、権威主義的態度の伝達度が高い群と低い群に分ける。2つの一致度間の四分相関値を Table 7 に示した。

Table 7 より母子間の態度伝達をみると、中学1年生では、母の態度としつけが一貫している場合には母の態度が子に伝わりやすく、非一貫であれば伝わりにくい。しかし、中学3年生では、母の態度としつけの一貫性は態度伝達と無関係であった。以上から、低年齢の子どもでは母親のしつけの影響が大きいといえよう。

Table 7 母の態度の一貫性と態度伝達

	小4・ 5年	小6・ 中1	中1年	中3年
一貫性の有無×F伝達	.237 V	.500 V	.743 V	.023 ^
母F×子F	.165	.199	.441	.369

2) 男子の場合

女子に比べて全体的に母親との相関が低い。従って、母の態度が子どもに伝達しにくいと考えられる。母子の

F得点相関は、年齢が上るに従い下降してゆき、中学3年ではほとんど無相関になる。これは、男子の場合、母親の態度を自分の態度形成の主なモデルにしなくなり、モデリングの対象を他に求めるためではないかと思われる。男子のF得点と父親の学歴の間には低い負相関がみられ、女子と父親の間は無相関ということからも、男子の態度形成には、母親以外の父親、家庭、学校などの影響がかなり大きいと推察される。

母親の態度の伝達を発達的にみると、中学1年以下では、母親の社会的態度としつけが一貫していると子どもに母の態度が伝わりやすいが、中学3年になると、一貫性と伝達は無関係になる。この傾向は女子の場合と同じであるが、母の態度としつけの一貫性の効力は、女子の場合より低いようである。

3) 性 差

性差について概観すると、全体的に母と子の相関は男子より女子の方が高い。発達的にみて、男子と女子とでは社会的態度を身につける時期に多少のずれがあると思われる。男子の場合、小学6年ごろ、しつけを媒介とせず直接に母の社会的態度を学び、年齢が上るに従い、次第に母の影響から脱してゆく。この際のモデリングの対象は、父親を初めとする広い社会環境の中に見出してゆくと思われる。それに対し女子の場合、低年齢では、母のしつけを通して母の社会的態度を学び、中学1年ごろになると、母の態度自体をも見るができるようになる。しかし、この段階では依然としてしつけの影響も大きいらしい。中学3年生は青年中期にあたり、母親の態度を客観的に見て、真の意味での自分の社会的態度を形成してゆくようになると考えられる。中学3年では男女ともに、急に親の感化から脱出する傾向が見られる。その際、男子は母の社会的態度としつけの両方から離れてしまうが、母の態度の女子への影響は依然として残っているようである。男子が女子よりも早く社会的態度を身につけるのは、わが国では、男子の方が幼いころから社会的自立ということを期待され、しつけられるためではないかと考えられる。

態度伝達を媒介するもの

前節で述べたように、直接的態度伝達が行なわれる場合、子どもは親の態度をモデルにして社会的態度を取り入れてゆくと仮定し、イメージ差を測定した。イメージ差と母子間のF得点の差の関係をみると、母へのイメージ差が大きい子ども——母親へのモデリングがうまくゆかない子どもは、母とのF得点の差が大きく、母子の態度伝達あまりされていない傾向がみられた。以上のよう

れるが、イメージ差の得点は、尺度数が少ないため信頼性も少なく、今後より正確な尺度が必要とされる。

中学3年生に対しては、自分の大切な問題を親に相談するか否かを問うたが、「親に相談する」子どものみで、母子のF得点相関をとると、「相談しない」子どももまざった場合よりも、相関が正方向に高まった。この年齢では、親がいかに民主的であっても、すべてを子どもの判断にまかせるということはあるえないと思われるので、「相談しない」と回答した子どもは、何らかの意味で親を拒否していると考えられる。このような場合には、当然、態度伝達は行なわれにくくなるであろう。

母親のF得点としつけ得点の間には、かなり高い相関があることから、本調査で用いた権威主義的しつけ尺度は、一応妥当であったといえよう。前述のように、本調査では、低年齢の子どもには母親のしつけの影響が大きいことが示された。従って、特に低年齢の子どもの権威主義的態度形成には、母親の権威主義的しつけを媒介とした母親の態度伝達が、大きな要因になると考えられる。

最後に残された問題点について、簡単に指摘しておきたい。

1) 本調査で用いた子ども用F尺度から、子どもに出やすい次元を抽出し、改良した質問紙を作成すれば、より低年齢の子どもにも施行可能になるであろう。また、その際には、認知テスト等の併用も必要と思われる。さらに、幼少児の権威主義的態度を測定するために、質問紙に代り得るようなF尺度が作られれば、権威主義的態度の形成に関する研究の有力な一手段になるであろう。

2) 本研究で用いたしつけ尺度は、基本的しつけ方針を問うものであったが、さらに、わが国独特の具体的しつけのうち、どれが権威主義的態度と結びついているのか、また、それらがどのように子どもの態度形成に影響を与えるのか等をも明らかにしたい。

3) 特に男子の場合の態度形成には、父親の影響が大きいと推察された。今後は、母親以外の人々の影響なども考慮に入れた広範な研究が必要とされよう。

要 約

権威主義的人格の形成について、母子関係に注目して、質問紙法による調査を行なった。母子の権威主義的態度を測るものとして、日本の伝統的文化体系を考慮に入れたF尺度を作成し、しつけについては、権威主義と

いう観点から、母子双方からの情報を得た。

結果より主に次のことが明らかにされた。

(1) 子どもの社会的態度形成には、母親の態度の直接のおよび間接的伝達に関係していると考えられる。

(2) 母親の態度の子どもへの伝達パターンには、発達差と性差があり、全体的に、男子より女子の方が母子間の相関が高い。

(3) 女子の場合、低年齢の時には、しつけを媒介にして母親の社会的態度を学ぶが、中学1年ごろになると、しつけに加えて母親の態度自体をもモデルにするようになる。さらに中学3年になると、しつけの影響から脱し、母親の社会的態度そのものをモデルとして、真の意味での自分の社会的態度を形成してゆくと考えられる。

(4) 男子の場合、女子より一足早く小学6年ごろに、しつけを媒介とせず、直接的に母親の社会的態度をモデルにして、自分の態度を形成する。そして、年齢が上るに従い急激に母の影響から脱し、社会化のモデルを母親以外の対象に求める傾向がうかがわれた。

文 献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J. & Sanford, R. N. 1950 *The Authoritarian Personality*, N. Y. : Harper.
- Bandura, A. & Walters, R. H. 1963 *Social learning and personality development*, Holt. Rinehart
- Frenkel-Brunswik, E. 1949 Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable : *Jour. Personality*, vol. 18, 108—143.
- Harris, D. B., Gough, H. G. Martin, W. E. & Edwards, M. Children's Ethnic Attitudes I. Relationship to certain personality factors ; *child Development*, vol. 21, 2, 83—91.
- Harris, D. B., Gough, H. G. & Martin, W. E. Children's Ethnic Attitudes II, Relationship to parental beliefs concerning child training ; *child Development*, vol. 21, 3, 169—181.
- Kirscht, J. P. & Dillehay, R. C. Dimensions of Authoritarianism, *A Review of Reserch and Theory*, Univ. of Kentucky Press.
- 品川不二郎, 品川孝子 田研式・親子関係診断テスト
日本文化科学社

ABSTRACT

THE DEVELOPMENT OF CHILDREN'S AUTHORITARIAN
ATTITUDES THROUGH MOTHER-CHILD RELATIONSHIP

by

Tamaki Isori, Keiko Okada, Hideko Oguchi, Miyako Fujita

Tokyo Women's Christian College

&

Tamotsu Fujinaga

Ochanomizu Women's University

This study is designed to investigate the developmental processes of children's authoritarian attitudes through mother-child relationship. For this purpose, the questionnaires are constructed. They are composed of two F scales, one of which is for children and another is the modified form of the former scale for adults, and the types of home discipline scale which measures the degree of mother's authoritarianism in home discipline, newly devised for this study. The construction of the F scale is fundamentally based on California F scale but is supplemented by some items taking Japanese specific culture pattern into consideration. As for the information of mothers' attitudes toward home discipline, the data are gotten from mothers as well as from their children by different scales.

There are 550 pairs of mother and her child and both their F and disciplinary scores are measured. These children range from 10 to 15 years of age.

The results are as follows:

(1) There are significant positive correlations between children's F scores and their mothers' F or disciplinary attitudes. It is probable that the mothers' social attitudes are transmitted to their children directly or indirectly through their methods of home discipline.

(2) The patterns of how the attitudes are transmitted from mothers to their children diverges

according to the age and sex of children. Generally, there are higher positive correlations between girls' scores and their mothers' than between boys' and their mothers' at age level.

(3) According to the patterns of intercorrelations between children's F scores or attitudes toward their mother's disciplinary methods, and mothers' F or disciplinary attitudes, it is considered that, in girls' case, at about 10—12 years old, they learn their mothers' authoritarianism mainly through their mothers' disciplinary method. At about 12—13 years old, they begin to adopt directly their mothers' attitudes as their socializing models, but they still continue to learn mothers' attitudes indirectly through the disciplines as before. At about 15 years old, they get out of the influences of mothers' disciplinary attitudes and build up their own social attitudes in the true sense of words, directly taking mothers' attitudes as their models.

(4) In the case of boys, at about 11—12 years old, earlier than in the girls' case, they build up their own social attitudes. Furthermore, mothers' attitudes are not learned through disciplines but are adopted as direct models. Increasing their age, they rapidly get out of their mothers' influences. Consequently, they would widely seek for other models of socialization.

付録 子ども用・母親用質問紙の質問例

◆母親用・F尺度 *注 ()内は各項目が属する症候群を示す。

非常に賛成	少しは賛成	ふつう	少しは反対	非常に反対
5	4	3	2	1

1. 「人を見たら泥棒と思え」ということばは人間の一面をあらわしているから、私達は、気を許せない。(シニシズム)
2. たいていの外国製品は、日本のものよりすぐれている。(服従)
3. ほとんどの人は、自分をよく見せるためにはウソをつくと思う。(シニシズム)
4. 「男は度胸、女は愛嬌」のことばどおり、男の人は強く、女の人は美しいのがよいと思う。(因襲主義)
5. 自分が一番偉いと思っている人を手本として、その通りにすることは大切だ。(服従)
6. 「郷に入れば郷に従え」のことばどおり、知らない土地ではそのしきたりに従うことが必要だ。(服従・因襲主義)
7. 世の中には、多くの社会不安があるが、それは不道徳な人達をとりしまれば解決される。(攻撃)
8. 皆が正装してゆくのにな、ひとりだけ平服で結婚式に出席するのは失礼になるから、行かない方がよい。(因襲主義)
9. 女の人が高等教育をうけると、理屈ばかりいって家事を熱心になくなるからいけない。(因襲主義)
10. 人間はやはり指導する人とされる人の二種類に分けられる。(迷信とステレオタイプ・権力とタフネス)
11. 自分だけがどんなに正しいと思っても、多くの人が反対することは、やはりやらない方がよいと思う。(服従)
12. 子どもは両親に素直に従うことが一番大切だ。(服従)
13. 礼儀を知らなかったり、悪い生活習慣が身につけてしまった人は、きちんと育った人とうまくやってゆけない。(因襲主義)
14. 女の方は、社会や政治のことには口出しせず、育児や家事に専念すべきである。(因襲主義)
15. 女の酔っぱらいは、うそをつくより悪い。(因襲主義)
16. どんなに表面は立派に見える人でも、人間は結局利己的なものだ。(シニシズム)
17. 貧乏な人は、その人が努力しなかったのが、その人の責任だ。(攻撃・権力とタフネス)
18. 世の中には悪い人もたくさんいるので、規則や法律をもっと厳しくした方がよい。(攻撃)
19. 人間の一生は、その人が生まれる時から運命が決っていて、ただその人が知らないだけだ。(迷信とステレオタイプ)
20. 世の中を大きく分ければ、強い人と弱い人に分けられる。(権力とタフネス・迷信とステレオタイプ)
21. 子どもや青年にとって一番大切なものは、きびしい訓練としつけである。(服従)
22. 恩を受けた人に頼まれれば、どんなことでもいやとはいわないでしてあげるのが人情だ。(美意識)
23. ありふれた雑誌や週間誌からでも、他の文学書以上の教養や知識を得ることができる。(反省)
24. いくら仲良くなった友達でも、あまり知りすぎると、見下げるような所がわかってくるものだ。(シニシズム)
25. 女の子はおとなになったら家庭の仕事をするのだから、普通の大学に行かせるよりも、洋裁や料理などを習わせた方がよい。(因襲主義)

◆子供用・F尺度：母親用F尺度の表現を改めたもの

◆子ども・しつけ①

あなたのお家では、次のうちどちらを多くいいますか。多くいう方に○印をつけてください。

1. みんなに親切にしてあげなさい。
2. 人にたよらないで、だれから見られてもはずかしくないようにしなさい。

◆子ども・しつけ②

あてはまるほうを○でかこんでください。

1. 同じようなことをしても、おかあさんにしかられる時と、しかられない時がありますか。 はい いいえ
2. おかあさんは、いつもあなたをほっておくかと思うと、時にはうるさいほどせわをやることがありますか。 はい いいえ

◆子ども・イメージ差

あなたがよいと思うおかあさんは、前のように5段階でつけるとしたら、次のとくちょうについてどれにあたりますか。○印をつけてください。

きびしい	5	4	3	2	1	あまい
こわい	5	4	3	2	1	やさしい
よく文句をいう	5	4	3	2	1	なにもいわない

では、あなたの実際のおかあさんは、どうでしょうか。前のように○印をつけてください。

きびしい	5	4	3	2	1	あまい
こわい	5	4	3	2	1	やさしい
よく文句をいう	5	4	3	2	1	なにも言わない

◆子ども・自由記述

わたしが悪いことをするとおとうさんは_____

◆母親・しつけ

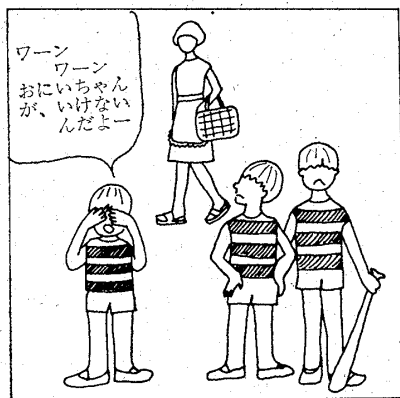
次にあなたのしつけについての御意見をお聞かせください。

〔1〕と同じように5, 4, 3, 2, 1でお答え下さい。

1. 他人と多少のまさつがあっても、自己の信念を捨てずに、生きるのもよいが、やはり人生を楽しく人々と和合して生きられる人に育てた方が、もっとその子の将来のためになる。
2. 子どもは、どうしていけないのかの理由さえも理解できないのだから、説得するよりも、おとなの判断によってきびしくしつけた方がよい。

賛成	5	4	3	2	1	反対
5	4	3	2	1		

◆MPT < B図 >



もし、あなたが、左のようなことをいっている子どもの母親だとしたら、どうしますか。

10字以上でお答え下さい。

- (1) あなただったらどうしますか。
- (2) あなたが(1)をしたあと、その子はどうなると思いますか。
- (3) この子の性格は、どんなだと思いますか。